教育

みかわ

第118号

定期総会・教育講演会
部会・委員会だより
各支部・各学校より
教育随想

三河教育研究会　　平成 28 年 7 月 11 日

二つの強みをいっそう生かす

三河教育研究会会長　水野達彦

森羅万象、命の輝きを誇る五月、蒲郡市民会館において、多くの来賓の皆様のご臨席を賜り、平成二十八年度三河教育研究会総会・教育講演会を盛会裏に終えることができました。心より感謝申しあげます。

【三河教育研究会の強み】

三河教育研究会は、昭和三十六年の創設以来、半世紀余にわたり、三河地区の全教員が、常に「子どもたちによりよい教育を保障しよう」と、「チーム三河」として教育研究にまい進してきた、すばらしい組織です。その強みは、「耳をすまして学ぶ」「分かち合う」という二つの言葉で表すことができます。

【耳をすまして学ぶ】

さて、現在もなお、東日本大震災からの復興に全力を投じている福島県。その福島県の生涯学習推進のために、谷川俊太郎氏が特別に作られた「学ぶ」という詩があります。あまり人口に膾炙（かいしゃ）した作品ではありませんが、九連構成で、彼らしい快いリズムを踏んでいる秀作だと思います。

その冒頭の一連は、「あなたは学ぶ／空に学ぶ／空はすでに答えている／答えることで問いかけている」。この「空」を「子どもたち」と置き換えてみますと、子どもの声に耳をすまして学ぶことの大切さに思い至ります。

また、第二連は、「わたしは学ぶ／土に学ぶ／隠された種子の息吹／はだしで踏みしめるこの星の鼓動」とあります。さらに第七連には、「わたしたちは学ぶ／本からも学ぶ／知識と情報に溺れぬ知恵／言葉を超えようとする言葉の力を」とあります。ここでは、教材の本質に耳をすまして学ぶことの大切さに思い至ります。

常に子どもの事実に寄り添い耳をすます、常に教材の本質に耳をすまして学ぶ、これは、まさに半世紀余にわたって脈々と受け継がれてきた三河教育研究会の理念そのものであり、また三河のすべての教員の指導姿勢を端的に言い表していると言っても過言ではありません。

【分かち合う】

三河教育研究会のもう一つの強みは、それぞれの教師が、常に「耳をすまして学び」、その成果や課題を持ち寄り、「分かち合う」場であることです。一人一人が学びとった財産を、学校ごとに、支部ごとに、そしてオール三河で「分かち合う」場として機能し続けてきたことは、全国にも例を見ないすばらしいことです。

もう一度、谷川氏の「学ぶ」に戻ります。その最終連には、こうあります。

「わたしたちは学ぶ／見知らぬ人の微笑みから学ぶ／喜びをわかちあうことの喜びを」。

「見知らぬ人の微笑み」を「他の教員の実践」と置き換えてみれば、本会の各種研修会や講座の価値に相当することがわかります。事実、どの研修会や講座でも、熱気のこもった協議が行われていて、会員が相互に学びの成果を分かち合う場となっています。

【いっそう「分かち合う」場に】

本年度は、こうした本会の強みをいっそう発揮するとともに、特に次の二点において、「分かち合い」の広がりを進めていきたいと考えます。

一つは、昨年度の磯谷会長が示された「学びの広がり」をいっそう推進します。各会で学んだことを学校に持ち帰って生かす手だてを工夫すること、そして、この四月にリニューアルされたＨＰに、会員のすばらしい実践の記録を集積して、それが積極的に活用できるようにしていくことに力を尽くしてまいります。

もう一つは、事業実施にかかる事務的な負担を、会員相互で「分かち合う」ようにしていきたいと思います。学びの成果も準備の負担も共に分かち合う、そんな会にしていきたいと思っています。

【むすびに】

最後になりましたが、本年度も会員一万二千余名が、本会の強みを実践に生かしながら、三河の子どもたちのために確かな歩みを進めてまいります。関係諸機関の皆様方にはこれまでと変わらぬご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申しあげます。

平成二十八年度 三河教育研究会役員

会長　安城　安城南中　水野達彦
副会長　田原　東部中　鳥居弘一
豊川　東部中　白井博司
豊川　音羽中　鈴村富士子
蒲郡　形原中　水藤彰啓
顧問　岡崎　竜美丘小　水野昌孝
会計監査　新城　鳳来中　原田隆行
西尾　西尾中　加藤宏基
幹事　碧南　日進小　中谷眞人
蒲郡　蒲郡南部小　壁谷幹朗
豊田　浄水中　片桐常夫
愛教大　附属岡崎小　柴田昌一
愛教大　附属岡崎中　岡田守
愛教大　附属特別支援　加藤博之
庶務　愛教大　附属岡崎小　尾崎智佳
愛教大　附属岡崎中　稲吉直樹
愛教大　附属特別支援　鎌谷祥行
会計　岡崎　梅園小　高須亮平
豊橋　南部中　宮崎正道
愛教大　附属岡崎中　小笠原真

◆評議員

（部会長）

国語　岡崎　常磐東小　近藤嗣郎
社会　豊橋　中部中　藤井直哉
算数数学　安城　安城南部小　久永克彦
理科　豊田　冷田小　鈴木正志
生活科　豊橋　八町小　伊丹和彦
音楽　豊田　寺部小　池田美枝子
造形　豊川　金屋中　河原淳
保健体育　豊田　猿投台中　柴田昌隆
技術・家庭　豊田　益富中　鈴木雅弥
英語（外国語活動）　蒲郡　塩津中　福井清司
道徳　豊田　広川台小　雁部好夫
特別活動　岡崎　常磐南小　山本信幸
特別支援教育　西尾　白浜小　清水文克
養護教諭　刈谷　朝日小　佐野吉則
総合的な学習　安城　桜町小　井上幹夫

（各種研究委員会委員長）

生徒指導　豊田　平井小　太田恵市
学校図書館　安城　志貴小　青山文子
学習情報　豊川　御油小　清水洋一
統計教育　岡崎　翔南中　加藤政幸
へき地教育　豊田　新盛小　津坂明宏

（支部長）

豊橋　高師小　岡本和未
豊川　御津北部小　岩下宏一
蒲郡　形原小　星野佳昭
新城　東郷東小　星野真久
田原　高松小　中川博文
北設　豊根小　渡邊俊也
岡崎　翔南中　加藤政幸
碧南　東中　高橋泰
刈谷　富士松東小　野村光
豊田　若園中　早川真澄
安城　篠目中　三浦陽市
西尾　一色中部小　杉浦美智子
知立　知立東小　杉浦茂
高浜　吉浜小　黒野盛聖
みよし　天王小　吉田増美
幸田　幸田小　林昭広

◆常任委員

総務委員会
委員長　豊川　東部中　白井博司
副委員長　愛教大　附属岡崎中　岡田守
委員　安城　東山中　加藤治好
西尾　平坂中　高木善隆
豊川　東部小　村松良樹
愛教大　附属岡崎中　稲吉直樹
愛教大　附属岡崎中　小笠原真

広報委員会
委員長　蒲郡　形原中　水藤彰啓
副委員長　愛教大　附属特別支援　加藤博之
委員　蒲郡　三谷小　稲吉久美子
岡崎　連尺小　鈴木勝久
幸田　北部中　加納達朗
愛教大　附属特別支援　鎌谷祥行
愛教大　附属特別支援　松岡史憲

調査委員会
委員長　田原　東部中　鳥居弘一
副委員長　豊川　音羽中　鈴村富士子
愛教大　附属岡崎小　柴田昌一
委員　豊田　駒場小　吉野薫
豊橋　汐田小　大竹俊丈
刈谷　富士松中　高畑泰志
愛教大　附属岡崎小　尾崎智佳
愛教大　附属岡崎小　村井正照

平成二十八年度
定期総会・教育講演会【報告】

五月十八日（水）蒲郡市民会館

五月十八日（水）、平成二十八年度三河教育研究会定期総会・教育講演会が、約千名の会員と多くの来賓のご臨席を得て、盛大に行われました。

定期総会では、まず役員が承認され、水野達彦会長を中心とした新体制が発足しました。水野会長はあいさつの中で、三教研を「創設以来、半世紀余にわたり三河地区の全教員が、『チーム三河』として教育研究にまい進してきた、全国に例を見ない組織」としたうえで、その強みを「耳をすまして学ぶ」「分かち合う」という二つの言葉で説明しました。

常に子どもの事実に寄り添い、常に教材の本質に「耳をすまして学ぶ」本会の理念や、その成果や課題を持ち寄り「分かち合う」場である本会の強みをいっそう発揮していきたいと述べました。

そのうえで、本年度は『分かち合い』の広がりの推進に向け、「参加者が学んだことを生かす手だての工夫」、「リニューアルされたホームページへの先進的な実践記録の集積と積極的な活用の方策づくり」、さらには「事業実施にかかる事務的な負担を、会員相互で『分かち合う』こと」に取り組むと力強く述べました。

就任のあいさつに続き、ご臨席の来賓を代表し、愛知県教育委員会委員の岩月慎自様のご祝辞、また、蒲郡市教育委員会委員長の鈴木康仁様より市長稲葉正吉様のご祝辞を代読していただきました。

岩月様からは、三河教育研究会が創設以来、三河の子どもに力をつけよう、そのためによい授業をしようという三河の教師の強い思いと結束した意識に裏打ちされた活動であること、それが三河の教育を推進し、子どもに力をつけたと確信しているとの言葉をいただきました。また、この活動がこれからも継続されていくことへの期待の言葉をいただきました。

鈴木様からは、夢と希望に満ちた二十一世紀の実現のため、三河教育研究会が、先輩諸氏の教育に対する情熱を継承し、常に先を見通した研究活動を進めていくことへの期待をお話いただきました。

ご祝辞ののち、前年度の活動にご尽力いただきました前会長の磯谷伸之先生、前副会長の戸田守彦先生、竹本正子先生に感謝状を贈呈いたしました。

それに続き、平成二十七年度の事業報告・決算報告、平成二十八年度の事業計画案・予算案について、すべての議案が賛成多数で可決されました。

当日は、多くの皆様のご協力により、盛会裏に終えることができました。ありがとうございました。

教育講演会

演題「窮地に立ったらどうするか」

講師　作家　嵐山光三郎氏

今回の教育講演会では、作家の嵐山光三郎氏に「窮地に立ったらどうするか」という演題のもと、ご講演をいただきました。

まず、嵐山氏は、「いざとなった時には、自分しか自分を助けられない」「友人が必要である」と前置きをされました。

そのうえで、今回は、近代文学の作家として名を馳せた、夏目漱石、正岡子規、森鷗外、芥川龍之介、三島由紀夫、川端康成らを例に挙げ、それぞれの人物が人生をどう生き、困難や窮地に立ったときにどのように振る舞ったのかを紹介されました。

【夏目漱石】

夏目漱石は、東京大学文科英文科を卒業し、東京師範で英語の教師となりました。しかし、神経衰弱になったり、ある女性との恋を振り切ったりするために、数年でその職を辞してしまいます。そして、大学の同窓生であった正岡子規の出身地である愛媛県の松山へ行き、松山中学の教員になります。そこで、小説『坊ちゃん』が生まれることとなります。

しかし、松山での生活もなかなかうまくいかず、一年で、熊本県にある熊本第五高等学校の教師となります。その四年後、イギリスへ留学をするものの、正岡子規の死も重なり、再び神経衰弱に陥り二年で帰国することとなります。そこから、本格的な作家生活が始まります。

嵐山氏は、このような漱石の人生を、常に「困ったときはどうするか」という命題を突き付けられていたとし、漱石の場合、「うまくいかなかったときは逃げる」という方法をとったとされました。

【正岡子規】

夏目漱石の大学の同窓であり、友人であった正岡子規は、東大を結核のため退学します。そして、『日本』という新聞社に就職します。日中戦争時は、従軍記者として一種の政治家の目で従軍記事を書きに中国に行きますが、帰りの船の中で吐血し、倒れてしまいます。

嵐山氏は、子規の有名な句を取り上げ、子規の生き様を紹介しました。

「柿食えば鐘が鳴るなり法隆寺」

という句があります。子規は結核だから吐血し、喉が渇く。だから、柿を食うことでと喉を潤していたそうです。そうやって柿を食べていると、法隆寺の鐘が鳴るという句であると解説されました。その視点から見ると、この句が、子規の命がけの句だったということがわかるとされました。

子規は非常に攻撃的だったから、自分がもう死ぬと思い詰めた時に、自分が置かれている状況と逆の句を詠んでいる。それが、子規の窮地のしのぎ方になっていたとされました。

【森鷗外】

夏目漱石のライバルであり、『雁』などの著名な作品を残した森鷗外。鷗外は、東大の医学部卒業後、陸軍軍医となり、二十二歳でドイツに留学をします。

森鷗外は死ぬ時には、陸軍の最高幹部である軍医官として、また、宮内庁の図書館の館長である宮内庁図書係という、宮内庁と軍の最高幹部としての地位を築いていました。しかし、鷗外はその地位をもっての死を選びませんでした。

鷗外は死に際し、誰も呼ばなかった(夏目漱石は多くの弟子に囲まれて死を迎えている)ことに加え、たった一人の友人の賀古鶴所に、自分の墓には軍の官位等を一切入れるなと遺言を残しているのです。

つまり、「森鷗外」ではなく、本名の「森林太郎」としての死を選んでいることがわかるとされています。嵐山氏は、そこに鷗外の生涯の孤独を見ることができるとされています。

【芥川龍之介】

夏目漱石の弟子であった芥川龍之介は、「唯ぼんやりとした不安」という遺書を残して、三十五歳という若さで自殺をしてしまいます。

自殺の理由はさまざまですが、芥川の場合は、その理由が「文学」、「文学に対する殉教」という形で自殺をしたのだと嵐山氏は説明されました。

近代文学では、芥川の他にも太宰治や三島由紀夫などの著名人も自殺によって自分の人生を終えています。

芥川は、三十五歳で亡くなる前にも何度も自殺未遂をしています。

このように、自殺を繰り返すほどに作品や自分を追いつめてしまうような作家であったと嵐山氏は説明されました。

【三島由紀夫】

一九七〇年十一月十五日、自衛隊の駐屯地に飛び込んで割腹自殺をした三島由紀夫。国を憂い、自衛隊に対して「何で君らは立ち上がらないんだ！」という演説をし、割腹しました。

三島が最後に書いた『豊饒の海』という四部作からなる作品があります。この作品のテーマは「輪廻転生」です。

嵐山氏は、三島は、「人は必ずよみがえる」「死んで誰かによみがえる」ということを信じていたのではないかと説明されました。

そして、ここから見えてくることは、三島は、「死」を恐れず、人は死んでまた生き返る。そのことを信じ、死ぬことが怖くなかったのではないだろうかとされました。

【川端康成】

三島由紀夫の師であり、七十二歳の時に三島と同じく、神奈川県にある逗子市の自宅で自殺をした川端康成。川端は、師として、三島の葬儀も取り仕切っています。

川端は、三歳の時に母を亡くし、五歳の時に父を亡くし、姉を亡くし、最後は十四歳の時に自分を引き取ってきた祖父を亡くすことになります。以来、一人であり、ずっと孤児でした。

その後、日本初のノーベル文学賞を受賞します。さらに、文化勲章などを受章することとなります。

このように孤独だった人物が、多くの名誉を手に入れ、「川端先生」と周りからもてはやされるようになります。それにもかかわらず、自殺をしてしまうのです。

そのような状況になってしまうのは、川端が、生まれながらの孤児だったからなのではないだろうかと、嵐山氏は説明されました。

このように、今回の教育講演会では、嵐山氏から、近代文学で活躍した六名の人物の生い立ちや生き様を紹介していただきました。

それぞれの作家一人一人の説明に加え、それぞれの人物のつながり、さらには、作品に込められている思いや願いについても詳しく解説してくださりました。

【お礼として】

最後に水藤副会長がお礼の言葉を述べました。

水藤副会長は、今回紹介していただいた六名の作家を取り巻く様々な人間関係を、まるでその時、嵐山先生が見ていたかのように、数々のエピソードを交え、お話されたことに対して、自身が高校時代に勉強した、文学史に出てくる多くの作家が、「このようにつながっていたのか」と改めて実感したと述べました。

さらに、かつて読んだ本を、うかがったエピソードを頭に浮かべながらもう一度読み直してみたい、そして学校でも子どもたちに紹介をして、読書にさらに励むきっかけになったらよいと述べ、お礼の言葉としました。

作家の人生について熱く語る嵐山氏

平成二十八年度　本部事業

生きる力を育成する三河教育

～指導力を高め続ける教員として～

総務委員会

これまで三河教育研究会（以下は三教研）は、常に、目の前の子どもを中心に据え、子どもの学びをより確かなものとする教育活動の在り方を、誠実に、また積極的に追究してきました。

三教研の強みは、子どもに確かな学びをさせたいという強い共通の思いをもった会員が集い、各学校、各地域で行った授業実践から学び合う場であるということです。実践をもちより、年代や立場を超えて熱心に語り合い、互いにその成果や課題を共有し合いながら、自身の指導力の向上に役立てているのは全国にも例を見ない組織です。

本年度も、三教研の主たる各部会・委員会の研修会・研究会において、魅力と実効性のある研修活動が計画されています。また、教育実践におけるミドルリーダーの養成を目途とした授業力養成講座も七年目を迎えます。会員の皆様の積極的な参加を期待しています。そして、参加し、学んだことを各地域や各学校に広げていただきたいと思います。

なお、四月より三教研のホームページをリニューアルしました。先進的な指導案や実践を数多く掲載していきます。会員の皆様からの情報提供もお待ちしています。

新アドレス：www.sankyoken.aichi-edu.ac.jp

国語部会夏季研修会	8／5	刈谷
国語部会書写実技講習会	7／29	岡崎
社会部会夏季研修会	8／5	蒲郡
愛知県数学教育研究会小中学校部研究大会	8／10	豊田
理科部会夏季研修会	8／3	豊田
生活科部会夏季研修会	8／5	西尾
音楽部会夏季研修会	8／2	岡崎
愛知県造形教育研究大会	11／4	春日井
造形部会夏季研修会	8／4	豊川
保健体育部会夏季研修会	8／3	豊田
愛知県家庭科教育研究会豊川大会	11／2	豊川
東海・北陸地区中学校技術・家庭科研究大会	10／27・28	名古屋・岡崎・安城
愛知県中学校技術・家庭科研究大会	8／5	豊橋
英語（外国語活動）部会夏季研修会	8／5	豊川
道徳部会夏季研修会	11／25	弥富
愛知県道徳教育研究大会	8／2	豊田
特別活動部会夏季研修会	8／5	岡崎
特別支援教育部会夏季研修会	7／29	名古屋
愛知県養護教育研究大会	8／9	安城
総合的な学習部会夏季研修会	11／22	豊田
愛知県生徒指導研究大会	8／19	稲沢
愛知県学校図書館研究大会	8／3	豊川
ＩＣＴ活用研究会	11／22	名古屋
愛知県統計教育研究発表会・講演会	10／25	北設
愛知県へき地教育研究大会	11／2	新城
授業力養成講座Ⅰ（西三河）	8／25	高浜
授業力養成講座Ⅰ（東三河）	8／26	豊橋
授業力養成講座Ⅱ（東三河）	11／9	新城
授業力養成講座Ⅱ（東三河）	11／18	新城
授業力養成講座Ⅱ（西三河）	11／28	高浜
授業力養成講座Ⅱ（西三河）	11／30	高浜
授業力養成講座Ⅱ（西三河）	12／6	高浜

部会・委員会だより

国語

「自らの言葉の力を磨き、ともに高め合う授業」

国語部会では、平成二十六年度より、研究主題を「自らの言葉の力を磨き、ともに高め合う授業」と設定し、人生を豊かに、たくましく生き抜いていく子どもの育成をめざして研究を積んできました。そのために、考えたい、表現したい、伝えたいという思いを喚起させる授業を構想し、子どもの主体的な学びを大切にしています。そして、学び合いの場で、仲間の考えに耳を傾け、自分の考えとの共通点や相違点に気づいたとき、子どもたちの思考はさらに拡がり、言葉の力もより磨かれていくと考えています。

また、三河各地の小中学生の作品を掲載する文詩集「みかわの子」の発刊をしています。生活作文や詩には、家庭や学校生活での出来事から子どもたちが感じた絆や自己の成長が綴られ、子どもたちの生活が生き生きと表されています。研究報告文には、生き物の生態や自然事象に対する疑問を、観察や実験をとおして明らかにする作品が載せられます。「書くこと」を通して豊かな心と確かな表現力を育てたいと考えています。

本年度、刈谷市で夏季研修会の開催を予定しております。分科会では、実践の提案をもとに、国語の授業について学び合える時間をつくれたらと思います。

○国語部会夏季研修会
・期日　八月五日（金）
・会場　刈谷市産業振興センター
・日程　十時三十分～十五時三十分
・講演　東京芸術大学准教授
　布施　英利　氏

詳しいご案内及び参加申し込みを各学校に送付させていただきます。多くの先生方のご参加をお願いいたします。

国語部会夏季研修会にご参加ください

刈谷市立刈谷南中学校　前村　恵

本年度、刈谷市産業振興センターにて、三河教育研究会国語部会夏季研修会が開催されます。「自らの言葉の力を磨き、ともに高め合う授業」をテーマに、分科会を行い、実践を通しての提案を研究協議します。また、中学二年国語の教科書に掲載されている「君は『最後の晩餐』を知っているか」の著者である布施英利先生を招き、ご講演をいただきます。多くの皆様にご参加いただくことで、より充実した会となることを期待しています。

保健体育

「課題に気づき、解決に向けて主体的に活動する体育学習」

体育科、保健体育科の目標は、心と体を一体としてとらえ、運動や健康・安全についての理解と、適切な運動の経験や合理的な実践を通して、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育てるとともに健康の保持増進と体力の向上を図り、明るく豊かな生活を営む態度を育てることです。その中で次期学習指導要領の改訂に向けて、アクティブ・ラーニングが推奨されています。そこで、保健体育科において、大切なことは、子どもが自らの意思で活動する授業だと考えています。自らの意思で活動するためには、教師が技能ポイントや作戦を紹介し活動させるのではなく、自分やチームの目標を達成するために必要なことは何か、考え行動することが大切です。

そこで、この学習を具現するために、小中学校とも「課題解決型学習」の充実を図り、小学校では、主体的・自発的な活動を取り入れた授業を展開することによって、運動に対する関心・意欲・態度を高めさせ、技能の獲得や活動意欲の高揚に努めます。また中学校では、学び方を高めるとともに、生涯にわたって運動に親しむために必要な資質や能力を育てたいと考えています。この考えに基づき、本年度より「課題に気づき、解決に向けて主体的に活動する体育学習」を研究テーマとし、具体的実践を通して研究・検証を行っていきたいと考えています。

〈本年度の主な活動〉

○保健体育部会夏季研修会

・期日　八月三日（水）

・会場　豊田市福祉センター

・講演「野球とわたし」

名古屋商科大学野球部総監督　中村　順司　氏

・小学校部会研究協議会

助言者　愛知教育大学教授　森　勇示　氏

発表者　田原・童浦小　石原　雄一先生

・中学校部会研究協議会

助言者　愛知教育大学教授　上原三十三　氏

発表者　碧南・新川中　磯貝　征伯先生

○全国学校体育研究大会福島大会

・期日　十一月十日(木)十一日(金)

・場所　福島県文化センター

分科会　県内十一会場

保健体育部会夏季研修会について

豊田市立高橋中学校　**平田　篤史**

本年度は、豊田市で夏季研修会を開催させていただくことになりました。研究テーマは、本年度より「課題に気づき、解決に向けて主体的に活動する体育学習」に変わり一年次になります。次期学習指導要領の改訂に向けて、アクティブ・ラーニングが推奨されています。また、小中学校とも「課題解決型学習」の充実が求められています。本年度は、小学校では碧南地区の先生が発表され、研究協議が行われます。多くの先生方のご参加をお待ちしております。

総合的な学習

「自ら探究し、共に学び合う総合的な学習の授業」

知識基盤社会化やグローバル化が進む今日、変化の激しい社会に対応するためには、思考力・判断力・表現力などが必要不可欠です。そのため、「総合的な学習の時間」では、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する「生きる力」を育むことがより求められています。

学習指導要領の「横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする。」という目標のもと、各校で児童・生徒や地域の実態に応じて創意工夫しながら実践を重ねています。本年度も、「自ら探究し、共に学び合う総合的な学習の授業（三年次）」を主題に掲げ、研究を進めることになりました。詳しくは、左記のように活動を進めていきます。多くの方のご参加をお待ちしております。

〈本年度の主な活動〉

○総合的な学習部会夏季研修会

・期日　八月九日（火）

・会場　安城市文化センター

・講演　名古屋大学大学院准教授　久野　弘幸　氏

・分科会

①豊橋市立東部中　齋藤　優先生

豊川市立一宮南部小　竹田　宗慶先生

②新城市立八名小　林　祐子先生

高浜市立高取小　鏡味　英修先生

③岡崎市立大門小　尾﨑めぐみ先生

西尾市立矢田小　梅田　育実先生

④刈谷市立朝日小　小嶋　英夫先生

幸田町立幸田小　加藤　大樹先生

⑤豊田市立井郷中　三嶋　陽介先生

安城市立安城西中　神谷香緒梨先生

○研究集録発刊

学び合いの先にあるもの

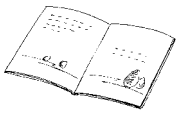
安城市立梨の里小学校　**井上のり子**

「A君とBさんは反対のことを言っているけど、安城梨『甘ひびき』を有名にしたいというのは同じで、やり方が違うだけだということが分かりました。」

昨年度、六年生の総合的な学習の時間での発言です。たとえ意見が違っても『甘ひびき』を有名にしたいという思いは同じであるという一体感が生まれました。この経験がうれしかった、楽しかったと多くの子がそう振り返りながら卒業していきました。

学び合いにより考えを深めたり、広げたりするのももちろん意義のあることですが、実践を通して、心も育つことを私自身も教えられ、よい経験となりました。

支部トピックス



田原支部

田原市独自の組織「教職員会」研修委員会の取り組み

田原市教職員会研修委員会

教職員会は、昭和五十五年に発足し、全教職員で構成されています。現在、二つの委員会があります。研究委員会は、希望優先で、教科や養護教諭、事務職員などの部会が構成され、三教研のテーマを受け活動しています。もう一つは年三回の研修を担当する研修委員会です。研修委員会の昨年の活動を紹介します。

六月には、全教職員と保護者を対象に教育講演会が行われます。昨年は、絵本作家の宮西達也氏から、「ニャーゴのやさしさ・ティラノのおもいやり」のお話を伺いました。読み聞かせから始まり、絵本を通した子どもとのかかわり方を学びました。

読み聞かせを実際に見せてくださった
講師の宮西　達也　氏

七月には、授業力向上セミナーを行っています。前年に続けて、昨年も愛知教育大学教職大学院教授の中妻雅彦先生を講師にお願いしました。「学力を意識した授業の工夫」と「授業づくりの次の一歩」という内容で、実際に指導にあたっている先生方の指導場面を取り上げ具体的なお話を伺いました。縄文時代のイラストを見て、グループ内で説明し合う活動がありました。お互いの発表を聞いて、専門教科や年数により視点が異なることを実感することができました。

八月には、今日的な課題を取り上げて教育課題研修会を行っています。昨年は、二〇二〇年度から変わる英語や外国語活動について研修しました。対象は、小学校高学年の教員、中学校の英語教員、小学校免許を持ち中学校で勤務している教員です。英語指導助手と一緒に班を編制しました。はじめに、Hi,friendsl や中学校英語の教科書を見ながら、中学校の英語と小学校の外国語活動の模擬授業を体験して現状を知り、次に指導員から今後の方向性を話してもらい、理解を深めました。

それぞれの研修での対象を意識し、資質の向上をめざして活動しています。

（文責・伊良湖岬小・河合　正人）

幸田支部

心身ともに健やかな幸田の子どもたちの育成をめざして

幸田町教育研究会

幸田町教育研究会は、前身の額田郡教育研究会のよき伝統を受け継ぎながら、その実績や反省を踏まえつつ、教育研究活動を深めてきました。昨年度、幸田町教育研究会が発足して十年の節目を迎えたのを機に、幸田町教育研究会の活動改編を検討しました。

従来の教育研究活動は、研究推進指定を受けた教科・領域の研究成果の発表会と協議会を設け、研修を重ねる方法でしたが、今年度からは、隔年で一研究部一授業実践を行い、教育研究活動が幸田の子どもたちと教職員にとってより実り多いものとなるようにしました。今年度は、二十九年度に実施される一斉授業研究会に向けて、各研究部で準備を進めているところです。

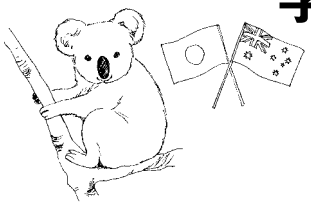
四月二十八日（木）には、幸田町民会館にて、幸田町教育研究会総会を行いました。今年度の教育講演会は、幸田町教育委員会　社会教育主事の石原憲人氏をお招きし、「青い目の人形と子どもたち～グレース・エッサが教えること～」の講演を聞き、平和について学びました。

この「青い目の人形」とは、昭和二年、日米友好の使者としてアメリカから贈られた人形のことです。愛知県には三百四十九体が届けられ、そのうち一体が幸田尋常高等小学校（現幸田小）にやってきました。友好の証であった青い目の人形ですが、太平洋戦争激化に伴い、敵国を象徴するスパイ人形として処分されました。戦後、難を逃れた人形が全国各地の小学校で見つかり、幸田小学校でも旧講堂から発見されました。平成二十七年には、幸田小学校に新たな人形が贈られました。贈り主は初代人形の贈り主のお孫さんでした。平和の象徴として贈られた「青い目の人形」は、時代を越え、平和の道を築いていくことの大切さを教えてくれています。

（文責・北部中・小林　淳）

講師の幸田町教育委員会
社会教育主事　石原　憲人　氏

学校自慢



海外の友人との心の交流

豊川市立御津北部小学校

本校では、平成十八年からオーストラリアのメルボルンにあるヒルサイド小学校と海外交流を行っています。単学級で一八〇余名の小規模な学校に、二年に一度、外国から友人が訪れるのです。昨年度は九月三十日から六日間、児童六名と先生二名が訪問し、四年から六年生のクラスで交流をしました。

本格的な準備は、六月から始まりました。海外交流実行委員によるオーストラリア集会を三回開催し、自然や文化、習慣を学んだり、あいさつや歌などを練習したりしました。また、教室や廊下に訪れる児童・先生の写真やオーストラリアの国旗を掲示するなど、全校で受け入れ態勢を整えてきました。

書写を教わるヒルサイド小学校の子どもたち

九月三十日午後、訪問団が到着しました。ヒルサイドの子どもたちはホームステイ先の子どもとともに各学級で生活をします。まだ小学生ですから、慣れないことに戸惑うのではないかと心配しましたが、子どもたちは積極的にかかわっていき、楽しそうに授業を受けたり、給食を食べたりしていました。本校の子どもたちも、ヒルサイドの子どもたちに刺激されたのか、知っている単語やジェスチャーでどんどん話しかけていきます。また、低学年の子どもたちも、休み時間のたびにヒルサイドの子どものところまで来て、名刺を交換したり、話をしたりしていました。

この海外交流が始まったころは、ほとんどの子どもが遠巻きに見ているだけだったそうです。長い間の交流を経て、子どもたちの姿も変わってきていると地域の方が話をしてくれました。「言葉が通じなくても心は通じるんだな」と多くの子どもが実感した交流となりました。

今年度は、八月に本校の子どもたちがヒルサイドを訪問します。どんな経験をしてくるのか、今から報告会が楽しみです。

（文責・立川　恵理）

中身で勝負する学校をめざして

岡崎市立翔南中学校

本校は、岡崎市立南中学校から分離新設して、平成二十五年度に開校しました。生徒数は五百四十三名、学級数は十八。

開校式で「新しさや設備だけでなく、中身を褒めてもらえる学校になろう」と生徒・教職員が誓い合って学校が誕生しました。「光・風・緑」をコンセプトとする最新の環境は、そこに集う人の心も明るく、溌剌とさせてくれます。光あふれる教室棟、開放感いっぱいの中央スペース、緑と風がやさしい校舎中央の中庭、武道場の屋上の岡崎市内が見渡せるプール。どれをとっても、自慢できる素晴らしい環境です。

「環境は人を育てる」という言葉のとおり、恵まれた環境の中で校訓「力を高め、心を磨き、夢を育む」のもと、生徒と教職員が一緒になって、「生徒が行きたくなる学校、保護者が通わせたくなる学校、教職員が働きたくなる学校」をめざして、日々がんばっています。

しかし、ここに至るまでの道程は大変でした。制服はきまっていたものの校歌、校章もなく、一年目に多くの人の協力で「手づくり」感あふれる作成過程で誕生しました。それだけに愛着もひとしおです。また「中身で勝負しよう」と言ったものの、部活動等の成果は振るわず、低迷。しかし、三年目を迎え、多くの優勝旗が翔南中にやってくるようになり、学習成績も伸びてきました。「石の上にも三年」という感じです。

そして、もう一つ自慢するならば、開校から今まで、校舎のガラスが一枚も割れていないことが挙げられます。でも、こういうことは言った途端にダメになることが多いので本当は言いたくないのですが、学校の充実ぶりを示していると思います。ただ、私たち教職員の合言葉は「治に居て、乱を忘れず」です。

（文責・加藤　政幸）

自慢の中庭でクリスマスコンサート

研究校紹介

学びを実感し、自ら学ぼうとする生徒の育成

ー自己肯定感・自己有用感を育む授業を通してー

刈谷市立朝日中学校

本校は、平成二十七年度より刈谷市教育委員会研究委嘱を受け、研究主題を「学びを実感し、自ら学ぼうとする生徒の育成－自己肯定感・自己有用感を育む授業を通して－」とし、研究を進めてきました。「教師が支え、生徒が創る温かな学校」を合い言葉に、生徒たちが全校討論会で創り上げた「まごころ学習スタイル」（みんなが授業に参加できるための聴き方、話し方）を大切にしながら、互いが安心して、積極的に意見を交わす授業づくりに取り組んでいます。

仲間とともに学ぶ楽しさを感じ取らせる授業を通して、自らの学びを実感させ、自ら学びを深めていこうとする態度を育みたいと考えています。

そのために、「読みが深まった、仕組みに気付いた、コツが分かった、腑に落ちた、何回やってもできる。」という学びを実感する瞬間を創り出すために、生徒の思考がつながる単元構成を工夫してきました。

また、生徒の知的好奇心を喚起させる教材の工夫、あるいは、ペア対話やグループの話し合いなど生徒同士が意見を交わしやすい学習を取り入れ、どの生徒も積極的に参加できる授業づくりに努めてきました。

それに加えて、仲間や自らの学びを振り返る場を授業の終わりに設定することで、「自分の考えが仲間に認められた」という喜びや安心感を生徒が感じ、自己肯定感や自己有用感が育まれるような授業を目ざして授業実践を進めています。

十月十八日（火）に研究発表を行います。全クラスの授業を公開します。授業を参観いただき、ご指導いただければ幸いです。

（文責・五十嵐　一視）

ペア対話で読みを深める生徒たち

私の研究

自ら学ぶ生徒を育てる数学学習

～生徒の問題意識を掘り起こした学習を通して～

蒲郡市立蒲郡中学校　木村　英勝

一　はじめに

生徒たちは、自分で粘り強く調べたり、考えたりしたことは自信をもって仲間に伝えることができます。そんな生徒たちが、「自ら学ぶ力」を体得していけば、数学の学習だけではなく、様々なことにいっそう自信をもって挑戦し、目標の達成や願いの実現に向けて自ら動きだすことができると考え、本実践を行いました。

二　実践

(1) 出会い・問いづくり

五種類の日常にある庭や床などの敷き詰めの写真を見せたところ、生徒は、「きれい」「廊下の写真？」「隙間がない」など様々な反応をしました。その中で「どうしてきれいに敷き詰められているの」とつぶやいた生徒の思いを全体に広げると、生徒たちは考え始めました。誰も解決できないこの疑問は学級全体の問いとなりました。加えて「どんな形ならきれいに敷き詰められるのか」という生徒の疑問を取り上げ、全員と対話をして問いを掘り起こすことで、「五角形なら敷き詰められるか」など一人一人が自分の問いと追究方法をもつことができました。

日常にある敷き詰めの写真の例

(2) 追究する・まとめる・広げる

生徒たちは、自分の問いを解決するために、図形を切って並べたり、角度に着目し計算をして規則を見つけようとしたりしました。追究が停滞した頃、生徒の追究テーマと方法を書いた見出しを追究テーマごとに分類して掲示した「構造的掲示板」を見る時間を設けました。すると、生徒たちは、自分の問いを解決するために、自分と違う考えの生徒に尋ねたり、同じ考えの生徒と考えを確かめ合ったりして仲間とかかわり始めました。話し合いを通して、「一箇所が３６０度になるように敷き詰めていけばきれいに敷き詰められる」ことや「多角形の内角の和の求め方」を見つけ出しました。問いを解決した生徒たちは、身の回りに敷き詰めがないか探し始め、日常に学びを広げました。

三　おわりに

生徒の生活に根ざした問題を掘り起こして学習を展開することで、生徒が自ら学ぶ姿をたくさん見ることができました。今後も、生徒が自ら追究していく単元を構想し、実践を重ねたいと思います。

構造的な掲示板を見て仲間とかかわり出す生徒

教室の窓から

ふるさとを愛し、問題解決の力を身につけた子どもに

～三年生「矢作川単元学習」～

西尾市立中畑小学校
髙橋　由美

本校では、ふるさとを流れる矢作川を教材化し、総合的な学習の時間を活用した「矢作川単元学習」を進めてきました。三年生では、矢作川にすむ生き物を飼育する活動を通して、矢作川の豊かさに気づき、生き物や自然を愛する心の育成をめざしています。その一環として、毎年、三年生は「親子魚つかみ」を行っています。休日に、保護者と矢作川の水が流れる用水路に出かけました。魚に詳しい地域の先生（魚博士）も来てくださいます。今年は、メダカ、ドジョウ、モツゴ、カマツカなど、多くの魚をつかみました。

つかんだ魚は、本校の矢作川教室で飼育します。今年度も「矢作川水族館を作ろう」を合言葉に、水槽に入れて、飼育観察をしていくことになりました。魚博士にアドバイスをもらいながら育てたい魚が共通する友達と班を作り、一班一水槽の管理を分担しました。餌のやり方、水槽の掃除の仕方、水替えの方法を調べ、それでもわからないことは、魚博士に聞きました。また、碧南海浜水族館の見学を行い、魚の紹介の仕方や水槽の中の様子、展示方法を学びました。そして、矢作川教室を矢作川水族館にするために、魚の名札を作って貼り、どんな魚がいるのか、見る人にわかるようにしました。また、水槽の中に水草や隠れ家になる石を入れたり、水槽の壁に紙を貼ったりして、魚がすみやすい水槽に工夫することができました。

三学期、子どもたちは、二年生に自分たちが学んだことをペープサート、クイズ、矢作川水族館ものしり事典、水族館の案内（えさやり体験）などを通して、伝えることができました。水槽の掃除の仕方や水替えの仕方を教えている姿には自信が満ちあふれていました。こうして子どもたちは、矢作川の生き物や自然に対して、愛着を深めることができました。

今後も保護者、地域の先生と協力しながら、地域のよさを生かした実践を進めていきたいと思います。

魚博士と水槽の準備をする子どもたち

私のコレクション

生徒たちの目を輝かせるサイコロ

豊田市立若園中学校　喜田村　次郎

私にサイコロを集めるきっかけを与えてくれたのは、『サイドタ』という、数学の教具でした。『サイドタ』は、立方体の普通のサイコロと違い、16㎜×18㎜×20㎜の直方体になっています。大学の数学の授業で、この『サイドタ』を渡されました。その時「確率1／6とは、6回振ったら1回出る可能性があること」と考えるのはおかしいと気づき、机の上で振り始めたくなりました。この教具が使われた授業を受けて、今まで『数が苦（すうがく）』だったのが、『数楽（すうがく）』となり、初めて数学が楽しいと感じることができました。このことがきっかけとなり、私は数学の教師を目指すようになっていきました。

実際に教壇に立つようになってからは、確率の授業の時には、必ず『サイドタ』を用いています。その時の生徒たちの目の輝きが忘れられなくて、他にも変わったサイコロがないかと探して、購入するようになりました。例えば、5種類の正多面体のものや、透明なサイコロの中にサイコロが入っているもの。球体の中におもりが入っていて、1から100までの目があるものや、一人でじゃんけんができるもの。ユニークなものでは、『I GO』や『YOU GO』と各面に書かれており、どちらが行うのか迷った時に使うものもあります。中には、私がサイコロを集めていることを知った生徒が、紙粘土で作ってくれた、世界に一つだけのものもあります。新婚旅行では、奥さんに白い目で見られながら、取り外しができる革のカバーがついたサイコロを、思い出の品として購入しました。

確率の授業では、生徒たちにサイコロや『サイドタ』を振らせ、各目の出方の〝でたらめさ〟を体感してもらうことが大切です。与えられた問題を、ただ解けるようにするだけでは得られない楽しさがそこにはあります。それをきっかけに生徒たちが少しでも数学を好きになってくれればと思いながら、今日もサイコロを探し求めています。

私の人生を変えたサイコロたち

教育随想(79)

教師のプロを目指して

碧南市教育委員会教育長
髙松　透

数年前に甥の結婚式が名古屋でありました。神社での式後、披露宴がホテルの宴会場で開催されました。終了後、親戚がみんなそろって、お茶でも飲もうということになり、一階のラウンジで一服することにしました。

十数人が、テーブルに着いたところに、若い女性の係員が来て、注文を取りました。「私は、紅茶。」「僕は、アメリカン。」「私は、オレンジジュース。」等々と、それぞれ、思い思いの飲み物を注文しました。そのとき、その女性がメモを取っていないことが気になりましたが、きっと暗記しているのだと思っていました。

そして、飲み物が来たときに驚きました。なんと、注文した人の所に注文した飲み物を運んで来たのです。その女性は、だれがどの飲み物を注文したのかも記憶していたのです。

ただ飲み物を運ぶだけではなく、お客にこの時間を気持ちよく、そして楽しんでもらおうという、プロの仕事に出会った思いでした。

先日、市長車に乗って出張に出かけたとき、運転手さんにこの話をしました。すると、その運転手さんは同じような話をしてくれました。

「市長を乗せて出張で、会議が開催されるホテルに行くときがあります。いつもすごいなと思うのですが、それは、ホテルの入り口で立って案内してくれる係の人のことです。その人は、一度行くと、すぐに車のナンバーを覚えてしまうのです。次に行ったとき、その係の人は、『碧南市の市長さまですね。こちらにどうぞ。』と案内してくれます。さすがプロだなあと思いました。それを見て、ぼくも運転手のプロになろうと思いました。」

お客に気持ちよく過ごしてもらう、おもてなしの心を大切にするプロの仕事だと思いました。

八年ほど前に左目の眼圧が急に上昇して緑内障になってしまいました。発病して一年ほど治療に通いました。お医者さんは、毎回時間をかけて診てくださいましたが、私の緑内障の原因は分からないとのことでした。そのお医者さんは、私に相談しながらいろんな薬を処方してくださいましたが、なかなか良くなりませんでした。

そのことを友人に話したところ、よい病院があると、違う病院を紹介してくれました。さっそく行ってみましたが、良くなるどころか、悪化してしまいました。また、以前の病院にもどり、そのことを正直にお医者さんに話したところ、「いろいろな先生に診てもらうのもいいことですよ。遠慮せずに行ってくださいね。」と言われました。そのお医者さんの言動に、医師としてのプロ意識と自信を感じました。最終的には、このお医者さんなら失敗してもよいという信頼感をもって、難しい手術をお願いすることにしました。幸い成功して現在に至っています。

私たちは、教育というとても重要な仕事に携わっています。教師の言動は大きく子どもたちの成長に関わっています。それだけに、だれにも負けない教師としてのプロ意識をもって、日頃の教育活動に取り組んでいきたいものだと思います。

編集後記

四月に最大震度7を記録した熊本地方では、今なお強い余震や大雨の被害が続いています。被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。

さて、先日、アジアで初めて命名権が与えられた原子番号113番目の新元素の名前が「ニホニウム」と発表されました。新元素を発見した九州大学の森田浩介教授は、会見でその喜びとともに「物理の授業が楽しくてのめり込んだ」と、科学者を志したきっかけを笑顔で話しておられました。

急速に教育改革が進む中にあって、改めて「楽しく学ぶこと」、「学ぶことは楽しいこと」を、まずは我々教師自身が実感していることが大切であると思います。今夏も各部会・委員会では、魅力溢れる研修会が計画されています。三河教師が集い、語り合い、学ぶことの楽しさを分かち合える有意義な機会となることを期待します。

ご多用の中、原稿をお寄せいただいた皆様に感謝申し上げます。

◆表紙の写真◆
「ICTを活用した『学び合い』の授業」
撮影　安城市立二本木小学校
早川　崇　先生

◆カット◆
愛知教育大学附属特別支援学校
神谷　宜欣　先生